

October 2014 no. 32



Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

共同利用・共同研究拠点 共同研究課題の研究成果特集 第2号

関野貞大陸調査等にかかる竹島卓一旧蔵建築写真

田良島 哲 関 紀子 三輪 紫都香

蔵書研究としてのデータベース構築
—デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の射程—
住吉 朋彦

旧・満洲で撮影されたチベット仏教美術に関する画像データベース

森 雅秀



河北昌平、明英宗裕陵の稜恩殿

関野貞と竹島卓一は、昭和6(1931)年に明陵を調査している。英宗(1435-1449、1457-1464年在位)朱祁鎮。当地は世祖永楽帝(1402-1424年在位)以後の明代皇帝陵を造営。稜恩殿(世祖は稜恩殿)の奥に明樓(その奥に墳丘がある)の屋根等が見えている。東方文化学院旧蔵写真帖・竹島卓一旧蔵写真帖いずれにも焼付けがある。

はじめに

東洋学研究情報センターは、平成21年6月に文部科学大臣によって共同利用・共同研究拠点に認定され、平成22年度から全国の関連研究者コミュニティに対し、より開かれたセンターとしても活動を開始しました。センターでは

アジア研究・情報開発拠点として行うにふさわしい共同研究課題を募集しています。「明日の東洋学」No.30に続き、今回も過去に採択され研究期間の終了した3課題について、成果をご紹介させていただきます。

関野貞大陸調査等にかかる竹島卓一旧蔵建築写真

田良島 哲* 関 紀子** 三輪 紫都香***

**採択課題：関野貞・竹島卓一による中国史跡調査写真
に関する基礎的研究（H25）**

はじめに

先に、当報センター報2013年30号において、平勢隆郎「関野貞大陸調査と古写真」が掲載された。東京大学工学系研究科建築学専攻所蔵のガラス乾板の整理、および東京大学東洋文化研究所（以下「東文研」という）所蔵の旧東方文化学院蔵建築写真・シートフィルム等についての概要がまとめられている。

また我々の東文研センター事業が採択され、その一半は東洋文化研究所東洋学研究情報センター叢刊17の平勢隆郎・塩沢裕仁・関紀子・野久保雅嗣編『東方文化学院旧蔵建築写真目録』として刊行された。この書の中で、下記に概述する東京国立博物館蔵（以下「東博」という）の竹島卓一旧蔵建築写真の一部も紹介された。

竹島卓一は、関野貞の下で育った俊英であり、関野貞が東京帝国大学を退任して東方文化学院に移った後、その助手として関野の調査を助けた人物である。現在東京大学東洋文化研究所に所蔵される建築写真は、ほぼ竹島卓一の手によって整理されたといつても過言ではないようだ。そのため、東博が所蔵することになった建築写真の半分ほどが、すでに東方文化学院において整理されているものの複製であった。それが、上記のセンター叢刊中にまとめられた、ということである。

筆者らは、現在上記叢刊中にもりこまれなかった建築写真を、あらためて整理し、刊行準備中である。この件につき、下記に概要を述べたいと思う次第である。

関野貞が明治後半から昭和にかけて行った大陸調査はフィールドカード・日記・写真・そして関野と常盤大定共著の『中国文化史蹟』にその内容をみてとることができる。東博には、上述したように関野の助手を務め、関野他界の後に東方文化学院研究員となり、関野の遺志を継いで『中国文化史蹟 増補版』を著した竹島卓一旧蔵の建築写真

**申請者：東京国立博物館学芸研究部調査研究課長
教授 田良島 哲**

（「中国史跡写真」）が所蔵されるにいたった。竹島が撮影・収集した5000点を越えるこの写真資料は、平成24年度に東博へ寄贈されたもので、寄贈以来、東博からの申請による共同研究の中で東方文化学院旧蔵建築写真と比較研究しつつ整理を進めてきた。本稿では先行研究から判明している関野貞に關係する古写真の全体像を示した上で、この「中国史跡写真」の概要と、整理の過程で判明してきた資料群の内容について報告する。

関野貞に關係する古写真

関野貞は東京帝国大学（現在の東京大学）、東方文化学院東京研究所（戦後東京大学に吸収）の職員であったことからその多くは現在も東京大学に収蔵されている。また、近年の研究の進展を受けて関係写真の寄贈も重なり、全体像が明らかになりつつある。関野貞に關係する古写真に関しては平勢氏の論稿に詳細が述べられているため、氏の報告を参考にまとめる。（『明日の東洋学』30号（2013年10月31日発行）、『東方文化学院旧蔵建築写真目録』の概要部分を参照）

1. 『芸術参考写真帖』

建築学専攻の教授であった関野貞・伊東忠太・塚本靖によって整理された17冊（約1600枚）の写真帖である。13冊が関野の整理によるもので、刊行物に使用されているものが多数含まれる。東京大学工学系研究科建築学専攻が所蔵している。

2. 『芸術参考写真帖』の原板

上記『芸術参考写真帖』にはガラス乾板の原板が存在し、現在は東京大学総合研究博物館に保管されている。また、東洋文化研究所に寄贈された山本照像館（写真館）作成のガラス乾板にも『芸術参考写真帖』に収められている写真的原板が含まれる。山本照像館を営んだ山本賛七郎は関野

の調査に同行した人物であり、調査時に2セットの原板を作成し、関野と山本がそれぞれ原板を所有していたと考えられる。

3. 関野貞・竹島卓一整理写真帖

主に関野が東方文化学院東京研究所に勤務していた時代に助手の竹島と共に行った調査の写真が収められている。写真は年度、調査地順に整理されており、昭和4年度から昭和9年度の全25冊（約3500点）で構成される。一部『芸術参考写真帖』と一致するものが含まれている。また欠号があり、その部分に貼られていたと思われるバラの焼付け写真439枚が存在する。現在は東京大学東洋文化研究所が所蔵している。

4. 関野貞・竹島卓一整理写真帖の原板

関野と竹島の整理による写真帖にも原板が存在するがガラス乾板ではなく、シートフィルムである。

ただし昭和9年度の冊に使用されている焼付けのうち石窟の写真は原板がない。これらは焼付けに「H.IWATA PEKING」と印字されており、東洋文化研究所には焼付けを購入した記録が残っている。この「H.IWATA」とは後に山本写真館を引き継いだ讚七郎の弟子、岩田秀則であることがわかっている。岩田の撮影した写真は同じものが京都大学人文科学研究所にも収蔵されている。

今回報告する資料は上記の写真資料に重なる内容を多く含む。

東京国立博物館所蔵「中国史跡写真」の概要

竹島卓一旧蔵の「中国史跡写真」は印刷物を含む写真資料で、写真の枚数を基準にすると約5500点からなる。写真資料の多くは竹島が関野の中国調査に随行した1930（昭和5）年から1935（昭和10）年のものであるが、中国の広

い範囲にわたって陵墓や寺院、宮殿などの建造物を撮影している。他に、大正期の関野の調査で撮影された写真も確認できた。印刷物は多くが大正期の関野の調査で撮影されたものである。

写真の大きさは様々であるが、多くがはがきサイズから八つ切りサイズにおさまる。裏面に宛名等を書くことができる葉書タイプのものも確認された。基本的には台紙1枚に付き写真を1枚貼付した状態で保管されている。竹島が個人的に撮影したとされる小版写真は名刺サイズのものと、それよりも更に小さなものがあるが、これらは台紙1枚に付き写真を2～7枚貼付して保管されている。

これらの資料は竹島が生前整理したものを竹島の令嬢で東博への寄贈者である池内節子氏が引き継いで整理した状況となるべく崩さない形で管理されている。基本的には小版写真を除いた形で撮影順となっており、間に大正期の同地の写真（印刷物を含む）が挿入され、最後に参考写真や参考印刷物、そして小版写真が配置されている。小版写真の原板の一部はシートフィルムで池内氏が所蔵していたが、近年東京大学東洋文化研究所へ寄贈された。

寄贈の経緯

竹島が保管・整理していた写真が、東京国立博物館に寄贈されるきっかけとなったのは、竹島の令嬢である池内氏が、東博で開催した特集陳列「清朝末期の光景一小川一眞・早崎穂吉・関野貞が撮影した中国写真一」（会期：2010年5月25日～7月7日）など東博所蔵の歴史的写真の展示と東博資料館における写真の整理公開の状況をごらんになり、この特集の担当者であった関紀子に、ご所蔵の写真を当館へ寄贈したい旨を伝えてこられたことである。池内氏から写真の保存・整理状況をうかがった田良島と関は、2012年11月に池内氏の手元にあった写真を一括して東博に仮



江蘇南京、明太祖孝陵石獸列

関野貞と竹島卓一は、昭和5年（1930）年に南京を調査している。明太祖朱元璋（1368～1398年在位）は南京に都を置き、帝陵もここに営まれた。東方文化学院旧蔵写真帖・竹島卓一旧蔵写真帖いずれにも焼付けがある。

預かりさせていただいた。すでに池内氏は、竹島の整理を引き継いで目録や画像データを作成しておられたので、これらの資料を参考に員数を確認した上、2012年度中に館内の会議を経て、ご寄贈を受け入れたものである。その間にやはり竹島写真に关心を寄せておられた東洋文化研究所の平勢氏とも連絡を取ることができ、これらの写真について共同して学術的な情報の調査を進めることのできる環境が整った。

調査の経過報告

「中国史跡写真」は竹島と池内氏が整理を進めてくださっていたこともあり、撮影年代や撮影地の特定が進んでいるものが多かったので東京大学所蔵の写真との照合が比較的容易であった。多くの写真は竹島の書き込みや『関野貞日記』などの文献資料から1930（昭和5）年～1935（昭和10）年のものであると確認できた。「中国史跡写真」は東京大学に原板や焼付けが保管されているもので、これを竹島が複製して用いていたものがほとんどであると考えられるが、中には東京大学には焼付けがないものや、原板がないもの、または現状では焼付けも原板も東京大学所蔵資料では確認できていないものも含まれる。奉天・慶陵・輯安などの写真についてはまとまった数の焼付けが東京大学には残されていなかった。

本資料群でご紹介したいものの1つに小版写真がある。竹島が個人的に撮影したとされる小版写真は建築物の他に風景写真や、煉瓦の製造過程、旅行中の1場面など公式写真では撮影されていない視点での撮影が見られ、建築以外の写真も含まれるため、調査の記録写真としても貴重である。また、この小版写真は刊行物への掲載にも使用されていることがわかっている。

関野と竹島は調査の写真について数種類の記号に分類し、番号を振っていた。CF・CPの番号が付いているものは多くが「関野貞・竹島卓一整理写真帖」に収められている。AF・BFの番号が付いているものは小版写真である。小版写真には他にAPという記号がついているものもある。番号が付されていない写真の中には「凌川照像館」の印が押されているものもあり、これまでに判明していない写真師が関与している可能性もある。このように複数の種類の写真が撮られていたという実態も、当時の調査形態を示す重要な記録である。

最後に簡単に述べておきたいことは、東博が所蔵することになった竹島卓一写真資料の特質である。すでに刊行した平勢等編『東方文化学院旧蔵建築写真目録』に言及されていることだが、東方文化学院の建築写真は、基本的に東京大学東洋文化研究所に継承されている。ところが、これらの東方文化学院資料は、戦時中に疎開するなど、移動を余儀なくされた。それらがどのように関わったかは謎のま



江蘇南京、梁南康簡王蕭石墓獅子の調査風景

関野貞と竹島卓一、昭和5年（1930）年調査のもの。竹島卓一旧蔵写真帖にのみ焼付けがある（ネガのシートフィルムは東洋文化研究所蔵）。写真中央に関野貞。

まだが、現在東洋文化研究所に所蔵される建築写真アルバムには欠号がある。そして、その欠号に貼られていたと考えられる焼付け写真が、バラの形で多数残されており、おおよそが復元可能である。その復元に際し、東博の竹島卓一写真資料がおおいに役立つ。そもそも、竹島が複製を作つて個人用に整理した写真帖が現在東博の所蔵になっているわけで、それが、東方文化学院建築写真の欠号復元に役立つのである。

さらにくりかえして述べておけば、東方文化学院に整理された写真以外に、竹島が個人的に所有していた写真資料が膨大に存在していたことが、明らかになった。それらも、きわめて大きな価値をもつことは言うまでもない。

おわりに

「中国史跡写真」のうち、東洋文化研究所に所蔵されている写真と同版の写真2349点については平成25年度に刊行された東洋文化研究所所蔵の関野に関する写真目録である『東方学院旧蔵建築写真目録』に掲載されている。それ以外についても東京大学所蔵の写真と同版のもの照合は一通り完了した。今年度末には東京大学との共同研究の成果として『東方文化学院旧蔵建築写真目録』に続き、『東京国立博物館所蔵 竹島卓一旧蔵写真資料目録』（書名は仮）を刊行する予定である。また、今後は中性紙封筒への収納及び一般利用に供するための撮影作業を行う。更に撮影地や年代が判明していない写真に関しても継続して調査を進める予定である。「中国史跡写真」の研究が関野貞による大陸調査の全容を解明する一助となると共に、本資料を用いることにより関係分野の研究が進展することを期待したい。

(*東京国立博物館 調査研究課長 **東京国立博物館 アソシエイトフェロー ***東京大学東洋文化研究所 特任研究員)

蔵書研究としてのデータベース構築 —デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の射程—

住吉 朋彦

採択課題：日本漢籍集散の文化史的研究－「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み－
(H24～H25)

本研究を開始する機運は、研究資料のデジタル化が進む趨勢の中、図書寮文庫のデジタル影像化と公開を決断された、宮内庁書陵部当局によって開かれた。

現在、図書寮文庫中の和書については国文学研究資料館が、蒐集した調査データとマイクロフィルムを用い、公開に着手している。また禁裏本、旧宮家、公家蔵書中の史料類は、東山御文庫や近衛家蔵書とともに、東京大学史料編纂所によってデジタル化が進行し、所内公開が始まっている。40万点に及ぶ図書寮文庫の全体からすると、これらの事業も始まったばかりと言ってよい。しかし、それ以上に立ち後れたのは漢籍の方面で、漢訳仏典もこれに同様であった。

図書寮文庫収蔵の漢籍は、稀少な写本や版本を含むことから斯界に著名であり、これに依拠した研究も数多い。しかし、デジタル化に於いて特に重要な過程は、何をデジタル化したのかという、メタデータの附与、書誌の附録である。そこで、日本を拠点に漢籍書誌学の研究を行ってきた慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に担当の打診があったが、これは一機関が担当するような事業ではなく、そのような力量もない。

文庫にとって不足と考えられたことは、調査に当たる人材の鳩合と、データ発信の基盤であった。そこで関東に於ける漢籍研究の一大中心であり、漢籍講習会を催し各種データベースを運用するなど、当該研究の先導役を果してこれら東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センターとの協同を念願し、国内各研究機関所属の諸賢に参加をお願いした上、当研究所大木康教授のご助力を得て、センターの共同研究にこの計画を提案させて頂いた。

書誌学の課題は、眼前的の書物の正確な著録と善本の提供に帰するであろうが、研究分野としての展開を問うならば、書誌学は從来、伝本研究と蔵書研究という、2つの型をもつている。これらは、両者相俟ち書物流通の系脈を明らかにする結節であり、目録解題という表現に凝集され、文化史の構築に寄与する。今日ではさらに、データベースという表現も、摸索されている。

共同研究の副題に「通時的蔵書研究の試み」としたのは、

申請者：慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・
教授 住吉 朋彦

図書寮文庫の特色を踏まえ、蔵書研究の型を用いて、その応用的研究に着手しようという意図による。図書寮文庫の形成期は近代に当たるが、その実態は、中世以来の各種蔵書の集合である。例えば旧藩の、例えば古刹の、それぞれ個別の蔵書が、前後に連環交差して、日本の蔵書文化を構成した姿を素描する、そんな目標を遠く掲げてみた。

さて、初動2年間の達成は、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部漢籍集覧」のシステム構築と、経部資料の収録である。経部といっても、日本の南北朝以前書写の旧鈔本と宋刊本のみを収めた。限られた研究期間にまとまりある成果を収めるため、収録に制限を設けたのであるが、これはもちろん経過的措置である。

それでも、ともに金沢文庫旧蔵の〔宋孝宗朝〕刊・单疏本『尚書正義』や、文永4至5年写・附訓本『春秋經伝集解』といった、江戸幕府以来の代表的蔵品を収めることができたことは収穫と言える。研究の成果は書誌の記述に込めており、原本伝來の姿が、より明晰に捉えられたのではないかと考えている。これらの書誌と全文の画像は、平成26年4月より、東洋学研究情報センターと斯道文庫内に設置の機器で、それぞれ所定の手続きに従い閲覧が可能となっている。是非高覧を頂き、システム改善のための意見を聴取したい。ただこれらの成果は依然として個別的であり、通時的蔵書研究の達成とまでは言えないが、今はその戸口に立ったというほどの段階にある。

研究の進捗には限界もあったが、その後の継続に期する所がある。それよりも今回の事業の成果は、多くの若手研究者が原本著録の作業に従事し、文献資料に基づく研究の過程を、共に経験してくれたことである。いささか手前味噌とはなるが、彼等の所感を掲載して謝辞と致したい。(住吉朋彦 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授・研究代表)

私は、本調査に参加させて頂くようになって3年目である。

1年目は、斯道文庫で行われる週2日の研修から始まった。そこでは、漢籍を対象とした書誌の取り方について一から指導を受けることが出来た。研修は、各自漢籍を担当

し、その書誌を事項毎に確認しながら進められた。各自の書誌を共有して進められたことで、様々な形態を持つ書籍の著録方法に関する知識を得ることができた。同時に、日頃の調査における疑問解消の場にもなった。1年目の夏以降、研修と同時に担当の漢籍を割り振られ、書陵部における調査が始まった。最初に担当したのは、『白氏文集』（元享4年写）である。この書籍には他の本との校合の跡が残されており、それを間近に見て調査出来たことは大変に貴重な機会であったと考える。

調査を通じて最も悩むのは、著録した書誌を基に書籍の題目やその成立時期について考えることである。宋版を著録した際、闕筆や刻工等見るべき箇所は多岐に渡り、考える事の多さに圧倒された。調査対象の書籍は、比較検討出来る本が少ないものも存在する。その為、自分一人では答えの出ないことも多い。月に1度、東洋文化研究所で行われる検討会は、デジタル化された画像を見ながら進められる。同一の画像を共有することにより、自分に欠けていた視点に気づかされ、対象への迫り方を具体的に教わっている。

一つの書物を担当し、それを調査することでも新しい学びが広がっていくことの面白さを日々、感じながら調査を進めている。（大木美乃 慶應義塾大学大学院後期博士課程）

本研究の成果の一端は、平成25年12月、東洋文化研究所における報告会で公表する機会があり、筆者は図書寮所蔵の南宋版『誠齋集』に関する報告を担当した。本書は中国にも既に伝本が無く、現存唯一のものである。民国期、漢籍善本の集成を期して商務印書館が刊行した四部叢刊所収の『誠齋集』は、清末の官僚で藏書家でもあった繆荃孫所蔵の写本を底本としているが、実はこの写本も図書寮本を祖とする。

本書は近世まで、京都五山の一、建仁寺にかつて存在した塔頭福聚院に所蔵されていたようである。平井芳男・長



夏季集中検討会の様子（佐藤道生撮影）

澤孝三によれば、維新以後、社会が大きく変動するなかで、寺社などから流出しつつあった貴重な書物を、明治20年代、内閣文庫が購入、保護した。本書もそうした書物の一つであり、さらに内閣記録局長および宮内書記官を務めた股野琢の提言によって、以後、管轄部局の変更などとともに散逸を避けるため、明治24年「萬古不易ノ帝室御府」に移管することになったという。

南宋期に出版され、わが国に渡って京都五山の蔵書となり、明治政府の書籍保護策のもとで現代まで伝わり、他方、近代中国の古典集成に間接的に寄与した、本書一つをとっても、さまざまな時代・地域の書物をめぐる文化と接点を有していることがわかる。こうした書物の来歴を明らかにするには、幅広い文化史的な知識が必要となる。本研究では調査と並行して、メンバーによる研修・検討を行うことで、これをカバーする体制をとった。また、成果は順次、原本画像つきのデータベースとして公開される予定であり、大方の御批正を請うとともに、国内外の古典研究・蔵書研究を大いに活性化させるものとなることを期している。（島田翔太 慶應義塾中等部講師）

本研究は、和漢の書誌学を専門ないしは研究基盤とする研究者が参画しており、筆者は調査研究員として参加する機会に恵まれた。若手研究者は、斯道文庫での研修を経て、実際に書陵部収蔵漢籍の調査に参加することとなっている。研修では、斯道文庫所蔵漢籍を用いて、書誌学の基礎から実地の調査まで、指導がなされた。

筆者は、日本古代中世の漢籍受容を研究テーマとしており、写本を調査した経験はあるものの、これまで唐本・朝鮮本・和本の別なく、調査すると言うことは経験したことはなかった。しかし、自己の専門か否かに関係なく、研修・調査の機会を得、四部に関わりなく調査に臨むことの重要性と難しさの一斑を学ぶことができた。また、検討会では、各自の調査に基づいて、調査報告をするのであるが、研究分担者が各専門の立場から色々な指摘をし、活発な議論がなされている。この検討会に参加し、和漢書誌学、日本漢文学、中国文学、中国文献学、日本史学の諸分野の協業に直に触れる機会を得ることができたことは筆者にとって幸いであった。

今まで、自己の専門の漢籍に限り調査していたが、研修、調査、検討会のそれぞれに参加することにより、専門以外の漢籍にも視野を広げ、幅広く調査すること、調査する上での前提になる目録著録法などの書誌学の知識を学ぶことができた。以上の学び得たことを活かし、自らの研究をより深めていきたい。（高田宗平 国立歴史民俗博物館研究員）

当研究プロジェクトの手応えは、第一に、短期間に多く



成果報告会の様子（高田宗平撮影）

の宋元版の実物を見比べることができた点である。宋元版は景印本が刊行されているとはいっても、書誌学は実見することが重要な学問である。初学者にとって、貴重な現物に触れる機会を得たことは、大きな経験となった。第二に、専門外の漢籍について総覧できるという点である。特に、仏典や古写本について、これまでほとんど勉強する機会を得られなかつたが、毎月行われる検討会では、さまざまな専門分野の研究者間の議論を聴き、未開の分野を開拓する良い機会となっている。第三に、書誌データ及び画像の公開は、国際的な研究の意義が大きい。今回の調査で宋版『論衡』の調査を担当したが、同本卷一には誤綴があり、そのままでは読めない。漢魏叢書本などの明版や和刻本はこの誤綴の連結部分に字を補って刊行している。一方、中国国家図書館蔵元明通修本は正しく編綴されているが、別版と思われる。また、上海図書館にも宋版とされる同書が存在するが、残巻が少なく公開されている部分では比較しがたい。当研究プロジェクトですべての画像をデータベース上に公開することで、日中各蔵本の比較検討がより簡便になり、『論衡』の版本研究及び日本への伝来系統の研究にとって、大変に意義のあることと考える。（矢島明希子 慶應義塾大学大学院後期博士課程）

私は研究実施当時、大学院で日本の中世文学を専攻していたが、これまで調査を含め、漢籍の原本に触れる機会はあまりなかった。また、書誌学に関する知識も少なかったが、研究グループでの調査を開始するまで半年間研修に参加し、漢籍についての基礎知識や、具体的な著録の仕方などのレクチャーを受けた。さらに、実際に調査を行う毎に学ぶことや理解することも多く、研究への参加を通して自分が大きく成長することができた。

調査では宋元版など貴重な漢籍の原本を実際に手に取り、1張1張目を通し、その漢籍の特徴をできるだけ詳しく記録するように努めている。しかし、自分一人では解決できない問題や分からぬことも少なからず出てくる。そ

うした時にはグループの共同研究者に気軽に尋ねることができる環境にある。とりわけ、毎月行われる検討会では、調査担当者が調査内容を発表し、様々な意見を聞くことができる。私が最初に調査発表したのは宋版の『世説新語』であったが、出版時期や版種についてなど、多くの助言を得ることができた。

研究グループには書誌学、日本文学、中国文学、東洋史など様々な専門の研究者が参加している。他大学や他分野の研究者と分野や時代を超えて共同研究を行うことで、異なる学問領域の多種多様な考え方から多大な刺激を受けることができる。共同研究であり、貴重書を取り扱うという点において責任の重大な研究であるが、このような刺激的で恵まれた環境の中で調査研究が行えることは非常な幸運である。（柳川響 早稲田大学日本古典籍研究所招聘研究員）

宮内府書陵部蔵漢籍のデータベース作成に関わる書誌調査は、ここまで宋元版と旧鈔本を中心に行われた。書誌学を志向する者にとって書物の価値とは、これを商う古書肆とは違って、刊写の新旧や伝本の多少に左右されるものではない。例え明治に頒布された片々たる小冊であっても、所謂貴重書と同様に丁寧に扱って、労を惜しまずに正確な書誌を期するようでなければならない。図書館や文庫が保存という観点から書物にランク付けすることは、必要に迫られたことであって、我々がそのような観念に囚われてはならないのである。とはいものの、この2年間に我々が直接に手に取り、著録の対象としてきた書物は、紛れもなく東アジア文化圏の至宝ともいべきもので、各書の校本を作る際に先ず考慮されるような善本中の善本であった。経験の浅い私達若手研究者に、これらの書物の閲覧が許されたことは、極めて驚くべきことである。

加えて、本調査においては、同時に斯道文庫において隔週で研修会が設けられ、著録の事後確認として東洋文化研究所において毎月一度の検討会が重ねられた。私達が著録したデータは、担当者によって修正が施され、検討会の俎上に載せられた。これらは著録データの精度を上げるために開かれたものであるが、視点を変えれば専門的な書誌学の指導ともいえよう。

これまでの調査では、宋元版特有の、版心の工名や本文上の闕筆、またその著録をさらに複雑にする補刻・補写等の問題も手伝って、表面上の記録に汲々となり、本来第一義とすべき対象書物の特性を知るという観点が欠けていた。現在、旧蔵者の家別調査が始まり、念頭にすべき事柄はさらに加わった。引き続き正確な著録を心掛けながら、狭隘な視野に陥らないように、目的をもって調査して行きたい。（山崎明 慶應義塾大学大学院後期博士課程）

旧・満洲で撮影されたチベット仏教美術に関する 画像データベース

森 雅秀

採択課題：チベット美術の情報プラットフォームの構築と公開（H24～H25）

申請者：金沢大学人間社会研究域人間科学系・
教授 森 雅秀

チベット美術画像データベース

平成24・25年度のセンターの共同研究として「チベット美術の情報プラットフォームの構築と公開」を実施した。本研究は、わが国の諸研究機関に所蔵されているチベット美術の画像データを整理・統合し、インターネット上で公開するための統一的フォーマットを開発し、整備・公開することで、チベット仏教美術の研究基盤を確立させることを目的とする。

チベット美術といつても、一般にその認知度は低い。エキゾチックな仏像や極彩色のマンダラがイメージされる程度であろう。しかし、アジアの仏教美術を総体としてとらえた場合、チベット美術はきわめて重要な位置にある。インドはもちろん、中国、ネパールなどの周辺地域の美術の影響を受けつつ、独自の様式を確立させ、その伝統は現在も生き続けている。他の地域には例を見ないような高度な図像体系を発達させたことも重要である。チベットで著された仏教美術やマンダラに関する理論書が膨大な数に上ることは、そのひとつのあらわれである。

さいわいにも、わが国にはこのチベット美術に関連して、相当な数の資料の蓄積がある。とりわけ現地調査において撮影された写真資料はきわめて豊富で、その中には、たとえば大正時代にチベットに入った青木文教による1世紀以上前のものまで含まれる。現在では失われてしまった寺院や貴重な文化財が、写真資料としてのみ伝えられていることも多い。これらの内容は世界的に見てもきわめて貴重である。

しかし、その一方で、わが国のチベット美術研究は仏教学の一分野としてあつかわれることが多く、教理や思想研究の付加的な位置に甘んじることが多かった。そのため、その資料も本格的な整理や体系化はほとんどなされていない。多くの資料が所蔵機関内部でのみ知られていることが多く、場合によっては、所蔵機関の関係者さえもその存在を知らないこともある。

本研究では、これらの写真資料を中心とした画像データベースを作成することで、その全体像を明らかにするとともに、関係する研究者はもちろん、一般の人々の利用の便に供することを企図した。研究期間中に重点的にデータ

ベース化を進めたのは「逸見梅栄による旧・満洲のチベット美術写真資料」（鶴見大学図書館所蔵）、「1970年代のインドのラダック地方、スピティ地方の写真資料」（高野山大学・チベット文化研究会所蔵）、「1990年代の中央チベットの寺院壁画資料」（正木晃撮影）、「青海省、四川省のボン教美術資料」（筆者撮影）などで、その一部はすでに公開されている（森雅秀『鶴見大学図書館所蔵逸見梅栄コレクション画像資料 1～5』Asian Iconographic Resources Monograph Series, Nos. 5-9, 2013～2014年, 総頁数1650頁など）。全体の成果については、別途、準備しているので、ここではとくに最初にあげた逸見梅栄のコレクションについて、その概要と意義について以下に述べる。

逸見梅栄とその仕事

横浜市鶴見区にある鶴見大学図書館には、逸見梅栄が戦前に中国で行ったチベット美術に関する調査の画像資料が保管されている（図1）。満洲、内蒙ゴ、北京（当時は北平）などで撮影された約1500点のガラス乾板を中心に、フィルム約200点、これらからプリントした写真約1200点、台紙に貼って整理された写真約800点などがある。満洲を中心とした中国東北部における、およそ70年前のチベット仏教美術の実情を示す貴重な資料である。

逸見梅栄は戦前から戦後にかけて活躍した仏教学者で、とくに仏教美術に関する多くの著作を残している。1891年に山形県に生まれ、東京帝国大学文学部梵文科を1917年に卒業し、1921年に曹洞宗留学生としてインドに渡り、3年のあいだ、サンスクリットとインド美術を学んでいる。この時期に実施したインドでの美術調



図1 鶴見大学図書館にある逸見梅栄資料の収蔵状況

査が、その後の逸見の研究の方向を決定づけた。帰国後はインド美術に関する著作を次々と発表している。

職歴としては、1925年に立正大学講師に任じられたのをはじまりとして、1935年には駒澤大学教授、1936年には多摩帝国美術学校（後の多摩美術大学）教授、1944年には梅檀学院（後の東北福祉大学）学院長、1958年には多摩芸術学園長などを歴任している。多摩芸術学園を定年退職後は、1963年に鶴見大学非常勤講師となり、1976年には大本山總持寺宝物館館長に任じられたが、翌年の1977年に在職のまま逝去した。調査資料が遺族によって鶴見大学に寄贈されたのも、このような晩年における鶴見大学あるいは曹洞宗との密接な関係によるものであろう。

逸見の研究は1937年頃にひとつの転機を迎える。この年にはじめて満洲を訪れ、その後、1941年まで毎年のように現地に出かけ、とくに中国東北部の承德にあるチベット仏教寺院の調査を精力的におこなっている。有栖川宮記念奨学金がそのための経済的基盤となっていたようで、1938年から1944年まで受給している。調査の成果は、まず『満蒙の喇嘛教美術』（法藏館）として1941年にまとめられ（仲野半四郎と共に著）、さらに『満蒙北支の宗教美術』（丸善）全8冊が1943年から44年にかけて刊行された。後者は当初、全10巻を予定していたが、解説編に当てる予定であった第1、2巻の出版は、戦時中の困難な出版状況から断念された。写真を中心とした第3巻から第8巻も、物資や技術者不足から、著者としては満足のいくものではなかったらしい。

戦後、中国での調査は事実上不可能になり、この分野における逸見の研究は停滞のやむなきに至ったが、終戦から四半世紀たった1975年に『中国喇嘛教美術大観』（東京美術）という大著を発表している。ただし、同書は『満蒙北支の宗教美術』で発表した写真を中心とした刊行物で、さらに前著である『満蒙の喇嘛教美術』の解説編が、ほぼテキスト部分に再録されている。かつて予定していた「幻の解説」が実現したわけではないのである。逸見にとって、あくまでも戦時中の刊行物における写真図版の不鮮明さを改善するのが目的であったようだ。ただし、同書においても、依然として図版がかなり不明瞭であることは否めない。

逸見梅栄コレクションの意義

今回、鶴見大学図書館に所蔵されている逸見梅栄関係の資料を調査した結果、さまざまな点で注目すべきことが明らかになった。その一部を紹介しよう。

逸見梅栄画像資料の中心は1500点以上にのぼるガラス乾板である。画像データベースのためにデジタルデータ化を行ったが、それによって、これまでの刊行物では不鮮明であった画像が撮影当時の鮮明さを取り戻すことがしばしばあった。逸見が目指した鮮明な画像の公開が、ある程度、

実現したのである。

刊行物の写真とガラス乾板の画像を比べてみると、鮮明さ以外にも違いがある。とくに、刊行に際して行われたトリミングによって、さまざまな情報が失われていたことがわかった。たとえば、作品の周囲に見られる寺院内部の景観から、当時の寺院の様子や、作品の安置状況が明らかになる。また、絵画の場合、表装部分はほとんどトリミングされているが、同一の表装から、複数の作品が一つのセットを形成していることがわかることがある。表装部分にはしばしば、逸見自身が付したと思われる作品番号が、紙片に記されて留められていた（図2）。逸見の資料の中には、承德や北京のチベット寺院が所蔵する仏像・仏画の目録が含まれているが、それとこの番号は対応するようである。

逸見は自著の中でチベット語訳の『賢劫經』の挿絵について言及しているが、図版は一切公開してこなかった。その全体がガラス乾板で残されていることがわかった（図3）。この作品については、インドの美術史家のローケーシュ・チャンドラが、挿絵部分のみを描き起して発表しているが（Lokesh Chandra, *Buddhist Iconography of Tibet*. Kyoto: Rinsen, 1986）、そこには含まれていない挿絵が逸見の資料には32点あることがわかった。おそらくこちらがオリジナルの完本であろう。

逸見がチベット美術以外にも宗教美術にひろく関心を持っていたことは明らかで、大乗經典や道教の絵画資料などを撮影している。たとえば、『法華經』『普門品』いわゆる『觀音經』の絵入りテキストは、西暦1395年（洪武28年）の版本で、『觀音經』の内容に加え、『華嚴經』『入法界品』に説かれる「善財童子歷參図」も描かれている。美術史的にも「觀音經絵巻」や「華嚴絵」の研究に重要な役割を果たす。

逸見の刊行物に含まれないものとして、中国の高僧たちの故事を、絵画



図2 無量寿仏（表装部分に番号を書いた紙片がある）



図3 『賢劫經』挿図
(上:龍樹、下:提婆、いずれもローケーシュ・チャンドラ版に含まれず)

所外委員

- 大西 克也 大学院人文社会系研究科・文学部教授
岩月 純一 大学院総合文化研究科・教養学部准教授
加藤 博 一橋大学名誉教授
小長谷有紀 人間文化研究機構理事
宮治 昭 龍谷大学文学部特任教授
宮嶽 博史 成均館大学校東アジア学術院(韓国ソウル)教授
柳澤 悠 東京大学名誉教授
山室 信一 京都大学人文科学研究所教授

所内委員

- 高見澤 磨 教授 東アジア研究部門(第一)
(兼)センター比較文献資料学
長澤 榮治 教授 西アジア研究部門
(兼)センター比較文献資料学
菅 豊 教授 新世代アジア研究部門

(オブザーバー)

- 平勢 隆郎 教授 センター造形資料学分野
板倉 聖哲 教授 東アジア研究部門(第二)
(兼)センター造形資料学
大木 康 教授 センター比較文献資料学分野
名和 克郎 教授 汎アジア研究部門
(兼)センター比較文献資料学
園田 茂人 教授 新世代アジア研究部門
(兼)センターアジア社会・情報
松田 康博 教授 汎アジア研究部門
(兼)センターアジア社会・情報

センタースタッフ

- 高見澤 磨 (たかみざわ おさむ) センター長
センター比較文献資料学分野 中国法研究
長澤 榮治 (ながさわ えいじ) 副センター長
センター比較文献資料学分野 中東地域研究
平勢 隆郎 (ひらせ たかお)
センター造形資料学分野教授 東アジア歴史社会
板倉 聖哲 (いたくら まさあき)
センター造形資料学分野教授 東アジア絵画史
大木 康 (おおき やすし)
センター比較文献資料学分野 中国文学
名和 克郎 (なわ かつお)
センター比較文献資料学分野教授 文化人類学
園田 茂人 (そのだ しげと)
センターアジア社会・情報分野教授 比較社会学
松田 康博 (まつだ やすひろ)
センターアジア社会・情報分野教授 アジア政治外交史

と文章でまとめた資料もある(図4)。筆者はこれと同一、あるいは類似する資料を見いだし得なかつたため、『仏教故事書家名筆集』と仮に名付けた。粘葉装の体裁で、見開きで一項目ずつ、右側の頁に絵画、左側の頁にそのテキストが記されている。全体で19項目を数えるため、本文は38頁となるが、これで完本であるかどうかは不明である。テキスト部分は『釋氏稽古略』をはじめとする数種類の文献からの抜粋であるが、現行の大正新脩大藏經所収のテキストと比べると、異同が多く見られる。さらに、テキストの筆跡は項目ごとに異なり、それぞれの末尾に署名がある。おそらく当時の有名な書家が筆を競つたのであろう。



図4 (仮題)『仏教故事書家名筆集』(テキストは『釋氏稽古略』)

研究の位置づけ

逸見が重点的に調査を行つたのは、満洲の南端に位置する熱河、現在の承德である。ここに残る外八廟は、清の乾隆帝の時代を中心に建設されたチベット仏教寺院である。逸見はこれらの寺院に安置されていた彫刻や絵画の写真を数多く撮影している。しかし、当時、この地域の調査を行つていたのは逸見だけではない。1930年代には著名な建築家伊東忠太を中心に、熱河の主要な建造物の調査や修復の活動がはじまっている。美術よりもむしろ建築の分野で、日本人の活躍が目立っている。外八廟についても、伊東の次男である祐信が長期にわたつて現地に滞在し、調査を行つているが、逸見の活動期間はその時期とほぼ重なつてゐる。実際、逸見の遺品の中には、「伊東祐信氏撮影」という書込のある紙焼き写真が含まれるし、伊東忠太の弟子である五十嵐牧太の著作『熱河古蹟と西藏藝術』(洪洋社、1942)には、逸見への謝辞が述べられている。逸見の調査を、戦前の日本における満洲研究の中に正しく位置づける必要があるであらう。

チベット美術に関する逸見の戦前の業績は、戦後ほとんどかえりみられることがなかつた。逸見の主著とも呼ぶべき『中国喇嘛教美術大観』は、わが国ではチベット美術研究の主要な文献として比較的よく知られている。しかし、その後のチベット美術研究者で、同書をもとにチベット美術の体系化を試みたり、同書に収められた作品を詳細に研究しようとしたものはほとんどない。これは、同書の写真の不鮮明さにもよるところではあるが、むしろ、逸見自身の研究がそのような方向性を持つていなかつたか、あるいは、あったとしても、実現しなかつたことによるのであらう。その結果、チベット美術の特殊性や難解さのみが、仏教美術研究者に強く印象づけられたのである。逸見の「喇嘛教美術」研究を再評価することは、日本のチベット美術研究をとらえ直すことにもつながるのである。

(金沢大学人間社会研究域人間科学系・教授)

センター便り

今後もこの「明日の東洋学」で随時研究成果をご紹介させていただく予定です。

また現在、平成27年度共同研究課題を募集しております。詳細は東洋学研究情報センターHP (<http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/index.html>) をご覧ください。

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第32号
発行日 2014年10月31日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839 (直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>

デザイン コスギ・ヤエ／印刷 (株)ヒライ